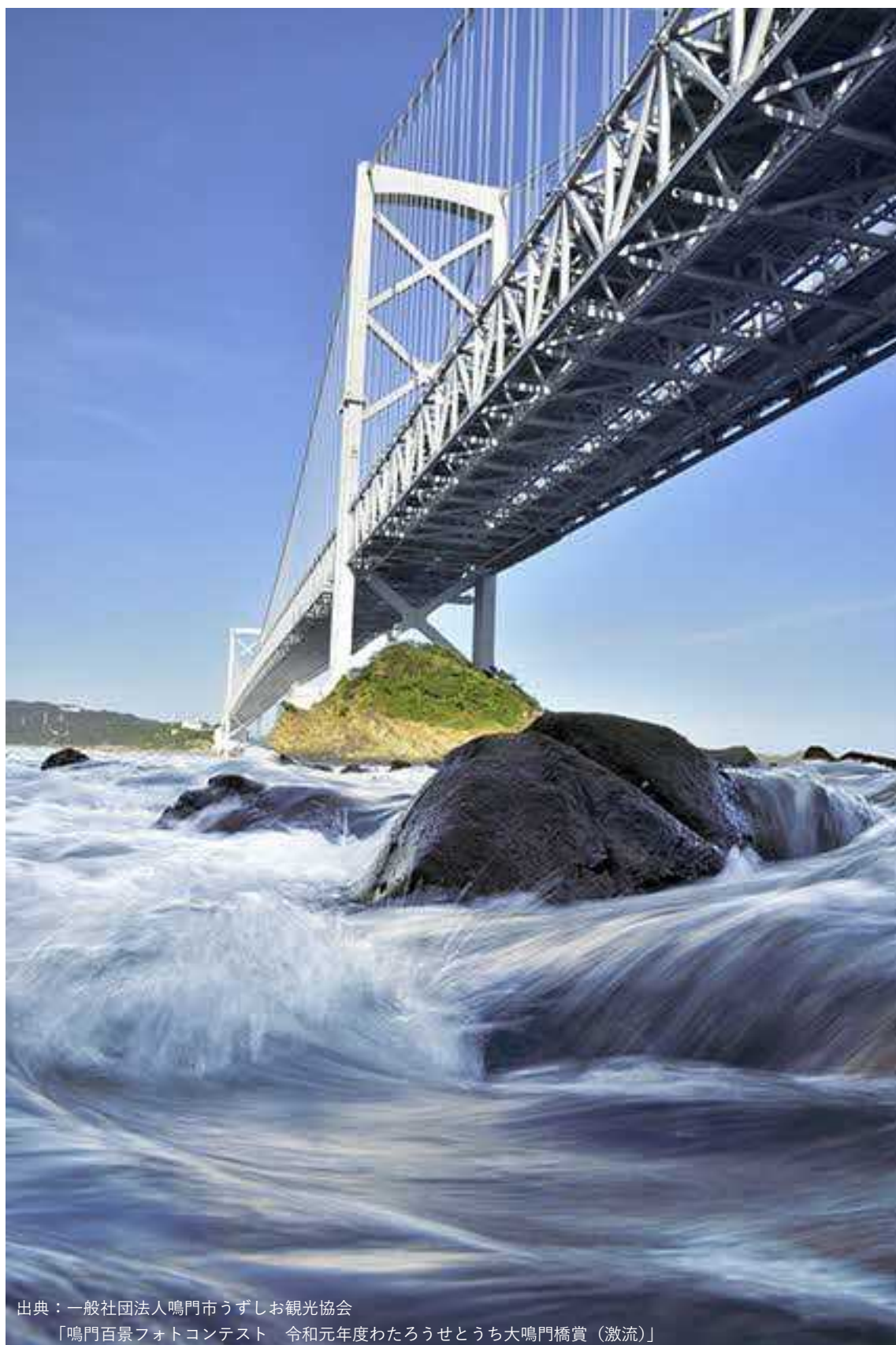


「鳴門海峡の渦潮」の文化的価値とりまとめ文書

「鳴門海峡の渦潮」 文化編

2020 年 3 月

兵庫・徳島「鳴門の渦潮」世界遺産登録推進協議会



出典：一般社団法人鳴門市うずしお観光協会
「鳴門百景フォトコンテスト 令和元年度わたろうせとうち大鳴門橋賞（激流）」



出典：一般社団法人鳴門市うずしお観光協会
「鳴門百景フォトコンテスト 平成 30 年度世界遺産をめざそうの部（歓声が沸く鳴門海峡）」



出典：一般社団法人鳴門市うずしお観光協会
「鳴門百景フォトコンテスト 平成 30 年度学生の部（わかめの水揚げ）」

目 次

1	文化遺産としての「鳴門海峡の渦潮」	2
2	文化遺産としての「鳴門海峡の渦潮」の歴史（観光、芸術・文学、生業）	
	（1）観光	10
	（2）芸術、文学作品	13
	（3）生業	18

文化遺産としての「鳴門海峡の渦潮」



小林永濯
「天之瓊矛を以て滄海を探るの図」
ボストン美術館蔵

1 文化遺産としての 「鳴門海峡の渦潮」

徳島県鳴門市、兵庫県淡路島の上に位置する鳴門海峡は、類まれな自然現象である「鳴門海峡の渦潮」が発生することで知られ、国内外から年間 100 万人の人々が訪れている。鳴門海峡の最適な展望地である鳴門公園及びその周辺は、1931(昭和6)年に国名勝に指定されている。また、1950(昭和25)年には、「渦潮に代表される動的な海洋景観」と「ウチノ海の静的な内海景観」からなる鳴門海峡周辺一帯が、「渦潮とあいまって鳴門海峡の風景を構成している」淡路島の門崎、大園島などを含めて、瀬戸内海国立公園に追加指定されている。

潮の満ち引きにより鳴門海峡に発生する我が国最速級の潮流と海底地形により発生する自然現象・自然景観である「鳴門海峡の渦潮」は、古来その神秘的な自然現象を見聞きする人々の感性と想像力を刺激し、古来和歌に歌われてきたほか、葛飾北斎、歌川広重を含む芸術家の作品にも描かれている。

海外の渦潮のなかには、ギリシャ神話の怪獣に例えられたメッシーナ海峡(イタリア)や、19世紀にはエドガー・アラン・ポーやジュール・ヴェルヌの世界的に有名なSF小説のモチーフとなったモスクストラウメン(ノルウェー)、ヴァイキングやマオリ族の伝説に残るコリーヴレッカ(スコットランド)、フレンチ・パス(ニュージーランド)があり、渦潮が人々の想像力を刺激する自然現象であることは時代を超えて世界に普遍的な特徴であると言える。

「鳴門海峡の渦潮」はまた、8世紀に編纂された我が国最古の歴史書『古事記』で、イザナギ、イザナミが天から矛で海をかき回し淡路島他の島を生んだとする国生み神話のモチーフとなったと考えられている。これは、この神秘的な景観が古代の人々に与えた印象の大きさを伝えると同時に、破壊的なイメージでとらえられることが多い海外の渦潮と比べて、国生みという創造的なイメージでとらえられていることは、特筆に値する。

江戸時代から明治時代にかけて日本を訪れた外国人らも、「鳴門海峡の渦潮」について見聞きし、驚きをもってこの自然現象・自然景観をそれぞれの国に伝えている。1690年から2年間日本を訪れ、ヨーロッパに日本の文化をいち早く紹介したドイツ人ケンペルの旅行記には鳴門の渦潮についての記述がある。また、1823年に来日したフランツ・フォン・シーボルトの著書「Nippon」には挿絵入りで「鳴門海峡の渦潮」が紹介されている。英語で出版された日本の旅行ガイド A Handbook for Travellers in Japan (1901年版)には、壮観な景色(grand sight)であり見逃すべきではないとして紹介され、1914年に出版された A Guidebook for Travelers (T. Philip

Terry) には、「日本のカリブデイス」としてイタリアメッシーナ海峡の渦潮を擬人化したと考えられるギリシャ神話の怪物と比較されるなど、海外の人々にとっても驚くべき自然現象、自然景観であることがわかる。

また、渦潮に象徴される日本最速級の潮流が発生する鳴門海峡は、古来、航海上の難所であるとともに、8世紀に成立した古代国家における主要な交通路のひとつである南海道の一部と位置付けられるなど、海運上の要所であった。

周辺の小鳴門地域及び淡路島には、古代より、航海術に優れた海人らが周辺に住み、渦潮（急流）によりはぐくまれた海産物を特産品とする漁業や製塩を営んできたことを伝える考古遺跡・遺物等が遺っている。

渦潮が発生させる日本最速級の潮流に育てられたワカメは今日も地域の特産品として知られているが、奈良時代にはすでに上述の南海道を通して、平城京に納められていたことが平城京で発掘された木簡からわかっている。

また、江戸時代の『本朝食鑑』には「肉の中の大骨の節の辺に瘤をつけたものがある。俗に、鯛が阿波の鳴門の急灘を乗り切ると骨が疲れるので瘤ができるといわれている」として、「鳴門鯛」が紹介されている。鯛は今日でも鳴門海峡の特産物であり、実際に骨に瘤をもつ鯛が確認される。

このような急流に生育、生息するワカメを採取したり、鳴門鯛の漁を行うためには、潮流の抵抗を最小限に抑え、操船を容易にするために造られたカンコ舟が使われた。1970年代にエンジン付きのFRP船が普及するまでは、鳴門海峡に出漁する漁船はすべてカンコ舟であった。

鳴門海峡を含む瀬戸内海沿岸は、近世に塩田が開発され、日本全国の需要量の約半分を生産した「瀬戸内十州塩田」として我が国の塩業史上重要な位置を占めている。小鳴門地域の竹島（現在の高島）には、淡路島の塩業家が移り住み塩田開発を行った結果、四方を海に囲まれた島の大部分が塩田で占められ、島民のほとんどが製塩に携わって生活するという生活形態が営まれた。この地で代々製塩業を営んだ福永家の住宅は、江戸時代の塩業家の建物が塩田と共に残された全国で唯一の建築物として遺っており、1976年に国重要文化財に指定され保存されている。

この地の塩業家は、過酷な塩業労働者をねぎらうため、ごちそうをふるまい楽しんでもらう年に1度の行事として「浜子遊山」を行った。浜子遊山に向かう舟では、海峡に発生する速い潮流を見物する観潮も行われた。これは、今日の観潮観光につながる伝統行事と考えることができる。

近代に塩の製造が工業化されたことにより、かつて300haもの面積で広がっていた鳴門の塩田は姿を消したが、今も変わらず小鳴門海峡の海水を用いた製塩業が営まれている。また、現代の主要産業となっている製薬業も、製塩の過程で発生するにがりに起源をもつものであり、塩業と関係が深い。

岩塩が存在しない日本において塩を入手することは容易ではなく、海水から塩を生産するには大変な労働力が必要であったため、塩の生産は古来特別な重要性を持っていた。淡路島では、弥生時代後期の遺跡から製塩に使用した土器が出土し、鳴門市では、古墳時代の遺跡から製塩土器が出土しており、この地域では古代において既に土器を使った製塩が行われていたことがわかっている。また、奈良時代に成立した現存する日本最古の和歌集である『万葉集』に、海藻についた（つけた）塩から製塩を行う「藻塩やく」という表現がある和歌は淡路島の海人娘子（あまおとめ）について歌った一首のみ（巻6-935）であり、この地が、古代の製塩においても特別な場所であったことがわかる。

『古事記』の国生み神話で、イザナギ、イザナミがかきまわした矛の先から滴り落ちた「塩」が固まって島となったとする描写は、古代に行われた、鹹水^{かんすい}を煮詰めて製塩した様子を想起させるものであり*、古代における塩の生産の重要性を示唆するとともに、また、鳴門海峡とこの地で塩を生産していた古代の人々の生活のつながりを伝えている。

*：前川明久「国生み神話にみえる塩」（『日本史研究』通号101, 1968.11, p27-41）、萩原浅男「記紀神話の風土背景-国生み神話を対象にして-」（『国語と国文学』通号54(6), 1977.6, p1-10）等では、大阪湾から播磨灘沿岸の海人が行っていた、製塩における鹹水をつくり煮て塩を得る過程が伝承化し、海人の信仰するイザナギ・イザナミ神の信仰と結びついて淡路地方の旧辞であったものが、宮廷に塩を貢上する際に宮廷儀礼の場で奏せられ、神話の原型として定着したとの説が唱えられている。

世界の渦潮の普遍的特徴と「鳴門海峡の渦潮」の特殊性

	普遍的特徴	特殊性
神話、伝説	渦潮は、神話、伝説、小説のモチーフとなっている。 鳴門海峡の渦潮：「古事記」、「日本書紀」（いずれも7世紀）の神話の舞台の一つとなっている。 メッシーナ海峡（イタリア）：ギリシャ神話（紀元前9世紀～8世紀。ホメロス作「オデュッセイア」）で、船乗りを襲うカリュブデイスはメッシーナ海峡の渦潮を擬人化したものと言われる。 モスクストラウメン（ノルウェー）：北欧神話を伝える「古エッダ」（時期不明だが、13世紀以前と考えられる）で、塩を産む石臼が渦に呑み込まれて海が塩水となったとの伝説がある。 コリーヴレックアン海峡（スコットランド）：ヴァイキングの王が呑み込まれて死んだとの伝説がある。 フレンチ・パス（ニュージーランド）：マオリ族の祖先クーペに仕えていた聖なる鳥（鵜）が、海峡の安全性を確かめようとしたが海に呑み込まれ岩となったとの伝承がある。	海外では人間や船を飲み込む破壊的なイメージが多いなかで、「鳴門海峡の渦潮」は、国を生むという創造的なイメージで描かれている。
芸術、文学への影響	絵画、小説等のモチーフとなっている。	鳴門海峡の渦潮：近世以降、葛飾北斎、歌川広重の木版画を含む、多くの絵画に風景（の一部）として描かれている。古来、詩歌にうたわれて、松尾芭蕉も2句の俳句を詠んでいる。 モスクストラウメン（ノルウェー）：エドガー・アラン・ポー「大渦に吞まれて」（1841年）の舞台、ジュール・ヴェルヌ「海底二万マイル」（1870年）で潜水艦ノーチラス号が最後に呑み込まれる。

	普遍的特徴	特殊性
名前	「鳴門」が、渦を起こす激しい潮流の音から名づけられたように、音から名づけられた渦潮が海外にもある（カナダの Old Sow は、直訳すると「年をとったブタ」でブタの鳴き声に似ているところから名づけられた）。	「鳴門」は、「渦」の代名詞として「鳴門唐草」（焼き物の模様）や「鳴門巻き」（食べ物）といった他分野にも広がって使われている。 モスクストラウメン（ノルウェー）に対して使われたノルウェー語のメールストローム（石臼で碾く＋流れ）が、英語でも whirlpool（渦の水）といっしょに使われるようになった。
人の往来	海上交通上の難所として知られている。	「鳴門海峡の渦潮」周辺では、古代より、航海術に優れた海人らが周辺に住み、渦潮（急流）によりはぐくまれた海産物（特にワカメ、タイ）を特産品とする漁業や製塩を営んできた。また、急流に対応する船を使用したり、生活のなかで観潮を楽しむなど、渦潮との生活を営んできた。鳴門市では、渦潮をかたどった市章を使用しており、地域のアイデンティティとなっている。 モスクストラウメン（ノルウェー）が発生する「ロフォーテン諸島」は、かつてノルウェー経済を支えた塩ダラを中心とする伝統的漁業を伝える複合遺産候補としてノルウェーの世界遺産暫定リストに掲載されている。地元モスケネス・コミュニティでは、渦潮を市の紋章にしており、地域のアイデンティティとなっている。 メッシーナ海峡（イタリア）に面するメッシーナ市は、古来より交通の要衝であり、第一次ボエニ戦争やペストの上陸地、十字軍の出航地等、多くの歴史的事件の舞台となった。 フレンチ・パス（ニュージーランド）は、19 世紀にフランス海軍のジュール・デュモン・デュルヴィルが、ニュージーランド周辺の探検の際に通過した。彼の航海の記録により、フレンチ・パスは航海の難所であることが知られるようになった。

	普遍的特徴	特殊性
観光	現代では観光地（イタリアのメッシーナ海峡、ノルウェーのモスクストラウメンは実際には渦潮の発生が明確でなく、渦潮観光は行われていない）。	陸上から見ることができる：「鳴門海峡の渦潮」、サルトストラウメン（ノルウェー） 船上観光のみ：モスクストラウメン（ノルウェー）

文化遺産としての「鳴門海峡の渦潮」の歴史
(観光、芸術・文学、生業)

(1) 観光

中鳴門

寛政九年八月一日
月夜
月夜

塩田を開発し塩の生産を行った塩業家は、過酷な塩業労働者をねぎらうため、ごちそうをふるまい楽しんでもらう年に1度の行事として「浜子遊山」を行った。浜子遊山に向かう舟では、海峡に発生する速い潮流を見物する観潮も行われた。

洪休と利用した情婦の遊山日記
 洪子全女外に洪子女中を加へたる
 故事用其日珍調味料飲料水水炭
 まさかへ舟乗立と山崎内海峽向
 り行く舟を満潮時押せりと體と押
 さす舵を振ひてく舟は流れ行く
 之森茂た阿波井村松老智の元は
 萬瀬天梯松頭上見せ前方は小島田
 が絵巻に浮んでゐるこは流れ舟を
 りりりりりりりりりりりりりり
 大行く暫く白浪まきこは目も
 にけるこは極養港の難所の北浦
 ありこにかなと舟はさく動揺しは
 思ふ間舟は北浦口と振られこは此所
 右内海と湾出流船釣とも水戸
 味とカニ舟付り来る洪子達と相談
 して大急ぎでつらつと買ひ舟に
 乗離れ舟を舟が馳せ出す舟は海
 に着りて思ふ料理は一極が舟と
 歌が始まる果て食事が終る頃は潮が
 衰へ引潮となる歸りは又洲に乗ると
 歌と歌は舟から降り来る事がある空
 に果て渡り遊山とある之は親が
 びき夏を昔も昔も昔も昔も昔も
 た。此の遊山は昭和三年六月の
 昔に於て澤山洪子と遊山遊山
 たり遊山遊山遊山遊山遊山遊山



浜子遊山圖

明治時代末期までは、鳴門は公園などの整備・開発がなされず、交通手段は汽船に限られていたうえ、要塞として開発され、様々な規制下にあったため、観光は盛んではなかった。しかし、1900（明治 33）年の小松宮彰仁親王の来県と観潮をきっかけに、地元鳴門村で公園整備を推進し、観光客誘致をめざす動きが高まってきた。1907（明治 40）年には観光客の激増に伴い、積極的な観光事業を推し進めるために村会議員によって鳴門の遊覧案内グループである鳴門保勝会が組織され、案内書や PR ソングの作成等、積極的な活動を行った。

1908(明治 41)年に鳴門公園と公園道路が整備され、同年に皇太子嘉仁親王（のちの大正天皇）が鳴門公園に行啓し、その後も皇族が観潮に訪れたため、鳴門は名勝地・観光地としての知名度をあげていった。商船会社は景勝地の写真等を載せたリーフレットを作成するようになり、これも鳴門の観光地としての知名度の向上に寄与した。



皇太子嘉仁親王（のちの大正天皇）が鳴門観潮で乗船された徳島藩御召鯨船千山丸。舳先が細く、小回りがきくものとなっていた。全国に唯一残る江戸時代の和船として国重要文化財に指定されている。

大正から昭和にかけての旅行ブームを背景に、瀬戸内海においても商船会社や鉄道会社が交通網を整備していった。商船会社が撫養から京阪神や高松への船を運行したり、阿波と淡路の鉄道会社がそれぞれ現在の撫養駅～吉成駅間、洲本～福良間に鉄道を開設させたり、そのほか遊覧自動車や乗合馬車等も運行され、鳴門へアクセスする交通手段が増えた。また、観光客向けのサービスを充実させていった。商船会社は定期船のほかに、観潮しながら宴会できる船や釣り船等、様々な貸借船を用意した。観潮船は大阪、神戸、京都、名古屋の商船会社、運輸会社等で申込できたほか、鳴門観潮連絡券を発売し、京阪神の 9 電鉄とともに鳴門観潮連絡運輸を開始する等、関西一円で観潮船を手軽に予約できるシステムが整備されていた。そのほか、地元の商工会が主体となって観光客への車のあっせんや出迎え、観光情報の提供等を行い、地元の観光客を迎える体制も充実していた。

1931(昭和 6)年に、鳴門の渦潮を展望するのに最も好適の地として、鳴門公園及び付近一帯の丘陵林地と海岸及び島嶼が国名勝に指定され、1934(昭和 9)年に瀬戸内海に面している 11 都道府県が、瀬戸内海国立公園をつくると、瀬戸内の水路を活用したツアーを商船会社が企画する等、新たな観光ルートがつくられた。鳴門・淡路島両側の鳴門海峡周辺一帯は、1950(昭和 25)年に瀬戸内海国立公園として追加指定された。

1985(昭和 60)年に鳴門海峡を跨いで鳴門と淡路島をつなぐ大鳴門橋が開通、1998(平成 10)年に明石海峡大橋が開通すると、鳴門地域への観光客の流入が急増する。船による移動は需要が少なくなり、運行の取りやめが続出した。観潮船は運行がつづけられ、今の観潮の主要な手段となっている。観潮船は、水中観潮船等の新たな形態の船も用いられている。

2000(平成 12)年大鳴門橋の橋桁下部に遊歩道「渦の道」が完成、渦潮を 45 メートルの高さから見学できるようになり、新たな観潮のかたちが生まれた。

(2) 芸術、文学作品

1) 文学作品、芸術作品から読み取れる鳴門の渦潮の様子

古代～中世の人々の鳴門の渦潮への認識

鳴門海峡は古くは「あはのみと（阿波の水門、粟門）」と称された。8世紀初めに成立した『日本書紀』には、黄泉の国から戻ってきたイザナギが、けがれを洗い流そうと粟門（現在の鳴門海峡）や速吸名門（現在の豊後水道）に行って様子を見ると、この2か所は流れが速かったので、橘之小門たちばなの おどに行って洗い流したとの記載がある。この頃から、鳴門海峡は潮流が速い場所として認識されていたことがわかる。

古代から中世の和歌については、「鳴門」が登場するものが少なくないが、実際に海峡や渦を見てその様子を読んだと思われるものは少ない。「なる」の掛詞や、「うら」「しほ」「ちどり」等の縁語等といった修辞技巧の一環として使われることが多かった。一方で、中世に成立した文学作品の中には、渦や潮の満ち引き、波の激しさ等が描写されているものがみられる。

鎌倉時代に成立した『平家物語』では、平通盛の妻で宮廷一の美女といわれた小宰相局が、一ノ谷の戦いで討死した通盛のあとを追って海に身を投げたとのエピソードがあり、平家物語に加筆して読み物としてつくられた『源平盛衰記』では、小宰相局のエピソードにおいて、入水した小宰相局を引き上げようとしたとき「折しも月さ朧にて、阿波の鳴門の癖なれば、満潮引潮あらそいて」と、潮の満ち引きが激しい様子が描写されている。このエピソードは「通盛」という謡曲にもなっている。この謡曲は僧侶が土佐泊浦で平家を弔って読経を挙げる場面において、「鳴門の 浦静かなる 今宵かな 波静かなる 今宵かな」と、鳴門海峡とは対照的に土佐泊浦の海面の静かさを描写している。

室町時代に成立した『太平記』では、鳴門海峡の渦の様子がはっきりと記載されている。

「澳おきの塩合に大きな穴の底も見えぬが出てきて、船を海底に沈めんとす。(中略) 雲珠うずの巻くに随って、浪とともに舟の回る事、茶臼を推すよりも速やかなり。」

また、航海の難所であったためか、鳴門は竜宮城の東門であって竜神がいるのだという伝承も語られている。

「この鳴門と申すは、竜宮城の東門に当たつて候ふ間、何にても候へ、竜神の欲しいつがらせ玉ふ物を海へ沈め候はねば、何もかような不思議ある所にて候ふ。」

日本人、外国人に感銘を与え、創作の源泉となった近世以降の渦潮

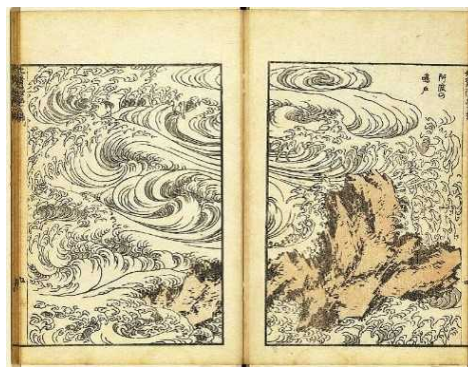
近世になると、文化人等による観潮が盛んに行われ、渦潮を題材にした和歌・俳句・絵画や、渦潮見物自体を作品として表現する「観潮記」・「紀行文」が多数残されるようになった。浮世草子の作家である井原西鶴は『西鶴名残の友』において、「心ざしたる鳴門見にまかりしに、音に聞きつるよりすさまじく、高浪白雲の風につるゝごとく、渦巻中程は、竜宮揺鉢かと、ひゞきわたるにおどろきぬ。」と、話に聞いていたより実際の渦潮はすばらしく、渦の中心は竜宮城のすり鉢のようになっており、大きな音を立てている様子に驚いた旨を記載している。

歌人・国学者である加藤景範は『観濤記』において、「海づら高くひきく、際だてゝ彼渦の中へ滝をなして落る、そのひゞきは山とゞろき巖ゆする、此南より北より落くるうしほ、こゝに行あふほどに、山のごとき波をおとすめり、その潮のとき事、矢をたとふるにもにぶく、みるにめくるめくとなん、」と記している。「波の上に数々の渦が巻き、見ているうちに渦の窟が海底に深く落ち入る。海面には高低が生じ、渦のなかに滝のようになって落ち込んでいる。浪がぶつかりあう度に山のような高波を起こすという、その潮流の速さは矢に例えられるが、（目の前の様子は）鈍く、もし（矢のように速い状況を）見たならば、目がくらむ程であったにちがいない」と、渦の様子を描写している。松尾芭蕉は「一汐に月引き落とす鳴門かな」「時雨けり晴けり鳴門汐干けり」の2句を詠んでいる。

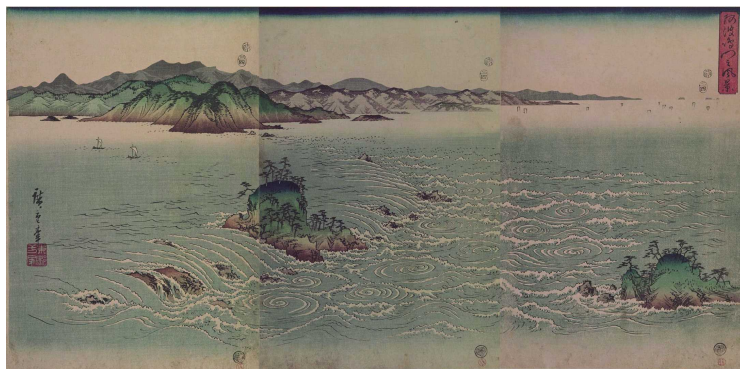
絵画においては、葛飾北斎や歌川広重ら時代を代表する絵師が浮世絵に渦潮を描いている。なかでも広重が安政4（1857）年に刊行した錦絵「阿波鳴門之風景」は、鳴門海峡の渦潮を花に見立て、リアリティ豊かな空間の奥行きとあいまって描かれたもので、特に評価が高い。



歌川広重「六十余州名所図会阿波鳴門之風波」
（国立国会図書館 蔵）



葛飾北斎『北斎漫画』七編「阿波の鳴門」
（山口県立萩美術館・浦上記念館 蔵）



歌川広重「阿波鳴門之風景」
（東京国立博物館 蔵）

江戸時代に日本を訪問した外国人ケンペル、シーボルトなども日本の優れた自然美の例として鳴門海峡の渦潮を挙げている。



シーボルト「Nippon」に掲載された
「鳴門の渦潮」挿絵（福岡県立図書館蔵）

神戸のポルトガル領事館の総領事を務め、退任後は徳島市で暮らしそこで生涯を閉じたポルトガル人モラエスは、鳴門の渦潮について以下のように驚きと感動を記述している。

「小山の頂きから不意に眺望がひらける。紺青の水をたたえた海、岩礁で砕けた波がつくるまっ白な泡が一筋そこを走る。眼前に淡路の島がくっきりと浮かぶ。さらに松の生えている二、三の小島。つらい旅をした甲斐があった。私たちは、鳴門海峡を前にしている。その風景は、画家の絵筆が絹布の上の意匠に、陶器に、漆器に好んで写し取る自然の美の極致に達した、みごとに日本的な風景である。」（モラエス『徳島の盆踊り』より）

「君、想像できるかい、海面の高さが内海と外洋とで2m近い落差を生じ、狂おしく逆巻きながら滝状の奔流となる光景を！」

（佃實夫『わがモラエス伝』よりポルトガル人の友人に向けた手紙の内容）

近現代の文学作品においては、物語の舞台として鳴門海峡を扱うものが増えるが、試練、困難、近づけそうで近づけない、謎めいているといったイメージと結びつけられているものが多い。

明治時代に書かれはじめた少年向け読み物では、鳴門の渦潮を体験し、その至難を乗り越えたあとに登場人物の精神の向上・変化が訪れるというパターンがみられる。

「右手遙に見ゆる鳴門の関に白く高く沸々として泡立ち渦巻きける潮が、太平洋に押出す狂瀾！怒涛！巨浪！我は瞬もせで唯其巨浪を見守つて、一心に仏の護念を仰いだ。（中略）命は無事に、撫養に上陸した時、我は独り泣いた。自分の弱いのに泣いた。多少修養したと思つたのに、之ばかりのことで恐るるとは何故であるか。あゝ千百の議論もだめである。多年の学問もだめである。議論以上、学問以上、どんなことがあっても動かぬ地盤を得ねばならぬと決心した。」（築川生「鳴門を越ゆるとき」（『精神界』1901.6））

戦いや少年たちの試練・修養というイメージと結びつけられる背景には、鳴門が要塞地として整備されたことに関係があると推察される。

鳴門は日露戦争（1904 年）を前に要塞として開発されたことで、写真撮影、写生、測量等が禁止された。一方で、鳴門への交通網が発達したほか、大正～昭和にかけての旅行ブーム等を背景に、鳴門の観光地としての知名度が上がったこともあり、鳴門を知るには実際に見るしかないという状況は人々の鳴門への好奇心を高めたと推察される。明治時代の著名な作家では、田山花袋が紀行文を、与謝野鉄幹・晶子夫妻が短歌を著している。

「鳴門かえ？それは流石に天下の大観だよ。潮の加減で、はっきり見えない時もあるそうだが、僕の行った時には、ずっと一線を成して白く泡立ってゐるのが手にとるやうに見えたよ。ちょっと億劫だから、人は滅多に出かけて行かないやうだけれども、好いところだね。是非一度は行ってみなければならぬところだね。」

（田山花袋「鳴門」『京阪一日の行楽』より）

「青き潮カプリの海に似るを見て秋の鳴門を船より渡る」

「秋の雲宵の鳴門に行き来して刹那に変わる瀬の色と月」（与謝野鉄幹）

「大鳴門潮を囀めるすさびゆゑ真白くなりし阿波の海かな」

「午後二時の男の鳴門潮みちし月夜のもとのをんなの鳴門」（与謝野晶子）

昭和では、吉川英治が『鳴門秘帖』を著し、大衆文学というジャンルを形作った作品の一つと言われるほどの人気を博した。

「崖松をすかして下をのぞくと真っ白だ。乱岩に散る波の銀屑である。そして白い無数の渦潮、或いは青黒い渦である。その岬からひと跨ぎに見える淡路の鳴門崎までの間五十件、飛島、裸島の岩から岩を拾ってゆけば、歩いて渡れそうだが、そうはゆかない。」というように、まるで来るものを拒むように渦が音を立てて巻く様子、要塞地帯であった鳴門海峡の謎めいた印象等、鳴門海峡の描写が、徳島藩は陰謀うごめく地であるというイメージを作り出すのに、効果的に使われた。この作品の出版以降、鳴門海峡を舞台にした大衆文学や映画がいくつつくられた。

20 世紀に入り出版されるようになった外国人向けの旅行ガイド等にも、鳴門の渦潮が紹介された。

「島の南西部の最も外側の岩の島と隣接した四国の間には、名高い鳴門水道があり、日本のカリブデイスとして知られている。」（T. Philip Terry A Guidebook for Travelers. 1914）

「南海の景色の中で、鳴門は最も衝撃的である。この壮大な光景を目撃したい観光客は淡路の鳴門崎か、鳴門海峡に横たわる小島、大毛島の孫崎に行くべきだ。徳島から船に乗り北へ約十マイル航行することもできる。渦潮は一つになったり離れたりして、無限の様々な素晴らしい光景を生み出す。この壮観は潮が満ちたときが最高である。」（The Netherlands and Japan – Japan of Today. Tokyo: Japan-Netherlands Society, 1914）

「海や滝の下渦巻は、人生のシンボルである：動揺、混乱、そして争い。しかし、それらはよく美しいものとして単一化される。それらは海獣王国の入口の門、または太陽礼拝と（淡路島近くの）鳴門の渦潮を間接的に関連付けられる。」（U.A. Casal “Some Notes of the Sakazuki and on the Role of Sake Drinking in Japan” Transactions of the Asiatic Society of Japan Vol 19. Tokyo, 1939）

「鳴門海峡の渦潮」に関わる有形、無形の文化財（文学、芸術作品）

項目	名称	備考
古代から中世以前の文芸と鳴門海峡	「古事記」	
	「日本書紀」	
	和歌に詠まれた鳴門	
	「土佐日記」と鳴門	紀貫之の遺跡(市史跡)
	「源平盛衰記」と鳴門	小宰相局の墓
	謡曲「通盛」と鳴門	
	「太平記」と鳴門	
	松尾芭蕉の俳句に詠まれた鳴門	
絵画に描かれた鳴門海峡	鈴木芙蓉「鳴門十二勝真景図巻」	徳島城博物館所蔵
	守住貫魚「鳴門真景図」	同上
	淵上旭江「阿波北泊」	「山水奇観」
	同「阿波鳴門」	同上
	同「阿波鳴門其二」	同上
	大坂河内屋太助「鳴門の渦潮真景図」(文化 11 年)	「阿波名所図会」
	斎紹真「日本名所の絵」(寛政～文化年間)	
	歌川広重「阿波鳴門之風景」	東京国立博物館所蔵
	同「阿波鳴門之風波」	「六十余州名所図会」
	葛飾北斎「阿波の鳴門」	「北斎漫画」7 編
	二代歌川広重「阿波鳴門真景」	「諸国名所百景」
	同「阿波北泊小鳴門」	「諸国六十八景」
	仙台藩士小池曲江「阿州鳴門図其一・其二」(天保)	
古地図と鳴門海峡の渦潮	四国古図	最古の渦表現。1633(寛永 10)年頃
	阿波国絵図	
	淡路国絵図	
	沿岸航路図	
	元禄 4(1691)年「日本絵図・名所入」	「鳴門の渦潮」の特記
	近世刊行日本図	
	明和 7(1770)年「道中記」など	10 個の渦の記載、その他 6 件の道中記にも渦表現
	安永 7(1778)年「阿州撫養図」(鳥瞰図)	
	宝永 13(1363)年「四国偏礼図」	
	『淡路国名所図会』挿絵	

（3）生業

1）ワカメ

肉厚で弾力のある歯ごたえや風味の良さ、鮮やかな緑色で有名な鳴門のワカメは、鳴門海峡で育まれる海の恵みの一つであり、鳴門市の特産品の一つとなっている。ワカメは古来よりその質の高さから献上品に用いられていた。

鳴門のワカメに関する最も古い記述は奈良時代の「平城宮跡出土木簡」にある。出土した木簡に「阿波国進上御贄若海藻壺籠 板野郡牟屋海」と記載があり、阿波国の牟屋（むや）海でとれたワカメ（「若海藻」）をひとかご献納したことがわかる。

鎌倉時代に成立した『鳴門中將物語』（なよ竹物語）は、ある少将の妻が、その機知によって天皇（後嵯峨天皇）の寵愛を受けるようになった。妻は夫の進めで参内し、夫は隠居したが、のちに中將に昇進し、天皇の側近に加えられた。その夫について、鳴門は「良い海布（め）」が取れることから「良き妻（め）」にかけて鳴門中將と呼ばれたという物語であり、当時も鳴門のワカメの品質の高さが評価されていたことが伺える。

江戸時代末期の阿波国の名物を扱った番付とされる『御国産名物見立相撲』においては、「東の方 前頭 鳴門若布」との記載が、山田竹系による食の番付『阿波の味番付』では「東横綱 鳴門わかめ」「西 大関 鳴門ダイ」との記載がある。当時は里浦の海土^{あま}によってワカメが採集加工されて徳島藩主の蜂須賀家に献上されていたほか、里浦以外に堂浦、北泊浦や土佐泊浦でもワカメ漁が行われていた。

明治時代では第2回内国水産博覧会では全国から出品されたワカメの中で最高の評価を得ている。

このように、鳴門のワカメはいつの時代も品質の高さが評価されてきた。

幕末から明治時代にかけて、鳴門のワカメは、「灰干し」というこの地域独自の加工法により、ワカメの保存性を向上させたことと、全国への販売ルートの開拓、不足する原料の確保による生産量の増加によって全国に広まった。

「灰干し」は1845年に里浦の前川文太郎という人物が讃岐地方に行商に出る途中で試作した灰干しワカメを洗って乾燥させ、「晒和布」という名称で販売して好評を得たことが普及のきっかけになったといわれている。この「灰干し」はワカメの色の鮮やかさや保存性の向上により、鳴門地域独特の加工法として発達した。

1960年代にワカメの養殖が始まるまでは天然ワカメを灰干し加工していた。天然ワカメを採取する際には、各地区からカンコ舟という木製船で中瀬等のワカメの漁場まで漕ぎ出し、ハコメガネと呼ばれる水中を覗く用具や鎌を用いてワカメを採取していた。



天然ワカメの口開け日にカンコ舟の上から鎌でワカメを採る様子（出典：鳴門市史 現代編）



カンコ舟の上からハコメガネで海中を覗く様子（出典：鳴門市史 現代編）

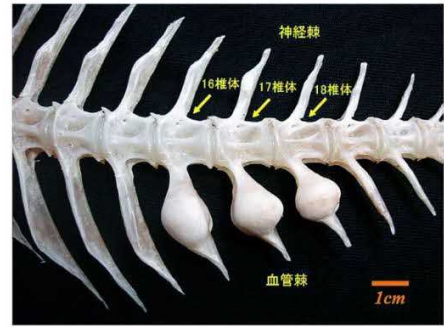
1958（昭和 33）年に徳島県水産試験場がワカメの養殖を試み、1967（昭和 42）年ごろに鳴門海峡・小鳴門海峡・紀伊水道沿岸でも養殖が始まると、鳴門市ではワカメの養殖が重要な産業となっていく。現在の徳島県産の養殖ワカメの生産量は全国 3 位であり、養殖に必要な種苗の育成は鳴門市内で行われる。

2) 鳴門鯛

鯛は縄文時代の遺跡から骨が出土し、『古事記』にも鯛が登場する等、古来より日本人に親しまれてきた魚といえる。江戸時代の『本朝食鑑』という書物には、「鳴門鯛」について、「肉の中の大骨の節の辺に瘤をつけたものがある。俗に、鯛が阿波の鳴門の急灘を乗り切ると骨が疲れるので瘤ができるといわれている」との旨が記載されている。

現在でも、激流を潜り抜けるために身が引き締まっており、小エビやイカナゴ等、栄養豊富な鳴門の海で育つため、肉質が良く桜色が鮮やかといわれている。

加藤景範の『観濤記』では、加藤らが鳴門市撫養の林崎浦の浅野元籍を訪ねた際に、元籍の父が「客人に対し鳴門の鯛をさし上げないのでは話にならない（失礼である）」と言って加藤らを鳴門鯛でもてなしており、当時、鳴門鯛は大切な客人をもてなす際に振舞われたことが伺える。



「鳴門鯛」(左)と「鳴門骨」(鳴門鯛の骨にできる大きなこぶ)(右)

(出典：全国漁業協同組合連合会 <http://www.pride-fish.jp/JPF/pref/detail.php?pk=1407288154>)

鳴門鯛の漁法は時代によって変化してきた。テグスを用いた一本釣りは江戸時代になって鳴門市堂浦の漁師が始めたものであり、カンコ舟と呼ばれる舳先が尖った小回りの利く舟で渦に近づいて、漁をするというものであった。カンコ舟は、三枚造りで細長く、舳先が大きくそり上がっているのを特徴とする、潮流の抵抗を最小限に抑え、操船を容易にするために造られた鳴門地域に特有の漁船で、1970年代にエンジン付きのFRP船が普及するまでは、鳴門海峡に出漁する漁船はすべてカンコ舟であった。



潮流の抵抗を最小限に抑え、操船を容易にするために造られた地域特有のカンコ舟。1970年代にエンジン付きのFRP船が普及するまでは、鳴門海峡に出漁する漁船はすべてカンコ舟であった。(徳島県文化の森総合公園 蔵)

彼らは瀬戸内海を出て他の地で漁を行う「タビ漁」を行ったことから、その漁法が全国に広まった。

鳴門鯛の漁場は裸島～飛島間や中瀬の北側と南側であり、激しい潮流の中、漁師が巧みに船を操りながら最適なポイントを狙って駆け引きをする様子が現在でも見られる。



「阿波国鳴門之図」（江戸時代、森文庫資料）に描かれた鳴門海峡、渦潮、カンコ舟

3) 製塩

鳴門海峡周辺では古来より製塩が行われてきた。淡路島では、弥生時代後期の遺跡から製塩に使用した土器が出土しており、そのころには既に製塩が行われていた。海峡の反対側の鳴門市では、古墳時代の遺跡から製塩土器が出土している。古墳時代の製塩遺跡からは、弥生時代のものとは形状の異なる大量の製塩土器が出土しており、古墳時代の製塩量は弥生時代と比べて大きく増えたことがわかる。

製塩土器を使用した製塩方法は、次のように行われたと古代製塩の研究者の間では考えられている。

ホンダワラなどの海藻の簀の子の棚に海水を何回もかけて乾燥させた後、焼いて灰にし、ざるに入れて海水を注ぎ、灰に含まれた塩分が海水に溶けてざるの下に鹹水だめに貯まる。鹹水だめの鹹水は、はじめ灰を含んだ黒褐色をしているが、しばらくすると灰が沈殿して上澄みにかなり透明な鹹水ができる。この鹹水を製塩土器で煎熬すると、白い塩ができる。



引野遺跡出土品 丸底式の製塩土器

(出典：淡路島日本遺産 H.P. <http://kuniumi-awaji.jp/heritage/17hikino/>)

8世紀初めに成立した日本最古の歴史書『古事記』には、伊弉諾・伊弉冉が混沌とした世界に矛をさしおろし、かきまわし、その矛の先から滴り落ちた塩の雫が固まってできたオノコロ島に天降り、淡路島をはじめとする大八島国を生み出したという国生みの様子が記載されている。そのエピソードは、5～6世紀ごろに大阪湾から播磨灘沿岸の海人が行っていた製塩工程が伝承化し、海人の信仰するイザナギ・イザナミ神の信仰と結びついた旧辞がもとになったといわれている（3ページの注参照）。

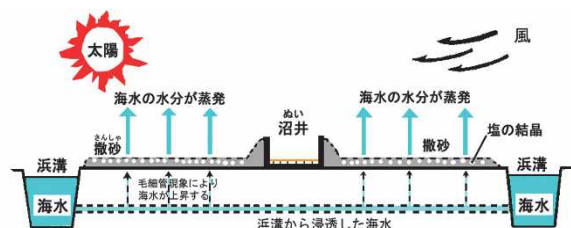
奈良時代に成立した現存する日本最古の和歌集である『万葉集』には、塩の生産に関する表現が十種程度残っているが、「藻塩やく」という表現がある和歌は淡路島の海人娘^{あまおとめ}について歌った一首のみ（「淡路島 松帆の浦に朝なぎに、玉藻刈りつつ夕風^{くみしおはま}に藻塩焼しつつ海人娘^{あまおとめ}」(巻6-935)）であり、万葉集の時代には、藻塩法ではなく他の方法が主流となっていたことが考えられる。

同じく奈良時代の「平城宮跡出土木簡」には、淡路国三原郡阿麻から「塩三斗」が献納されていることも記載されており、奈良時代においても淡路島で製塩が行われていたことがわかる。

中世には、淡路島では河口近くの三角州を利用して、汲潮浜^{くみしおはま}という満潮時に川を上ってきた海水を汲み上げる浜がつくられ、そこで塩の結晶が付着した鹹砂^{かんしゃ}（塩の結晶が付着した砂）をつくり、それを海水に溶かして鹹水^{かんすい}をつくる製塩法が行われたと考えられる。

近世になり、鳴門撫養周辺で、徳島藩主の蜂須賀家政が塩田築造を奨励したことをきっかけに製塩が発展していく。蜂須賀家政は、塩のとぼしい阿波国のため、播磨国

から技術者を呼び寄せ、塩づくりをさせたところ、撫養が製塩に適した環境—波が静かな遠浅の海浜と大量の砂があり、潮の干満の差が比較的大きいこと、晴天が多く、風が強いという鹹水づくりに適した気候であることなど—であることを知り、塩田の開発を奨励した。淡路島でも福良に新たに塩田をつくる際に、「撫養へ行って必要な砂・粘土などの材料や道具類を舟いっぱい積んで帰ってきて、塩田開発をした」との伝承が残っており、撫養塩田を参考に塩田開発を行った。



小鳴門周辺の竹島（現在の高島）には、淡路島の塩業家が移り住み塩田開発を行った結果、四方を海に囲まれた島の大部分が塩田で占められ、島民のほとんどが製塩に携わって生活するという生活形態が営まれた。

この地で、代々製塩業を営んだ福永家の住宅は、江戸時代の塩業家の建物が塩田と共に残された全国で唯一の建築物として遺っており、1976年に国重要文化財に指定され保存されている。屋敷地は周囲に石垣を築き、その北側に接して入浜塩田が残る。屋敷地内には主屋をはじめかんすいだめ鹹水溜、塩納屋・薪納屋の製塩に関する建物や離座敷、土蔵、納屋が建ち並び、屋敷構え及び塩田も近世製塩業の姿を知る上で建造物と一体をなすものとして貴重であるとして、宅地及び塩田を含めて指定された。



江戸時代の塩業家の建物が塩田と共に残された全国で唯一の建築物である国指定重要文化財 福永家住宅（鳴門市高島）

明治時代には、塩の生産量が過剰になり、塩の価格が下落したため、瀬戸内十州塩田の塩業者が組織する十州塩田同盟は休浜による生産制限で需給調整を行った。製塩法は江戸時代とほぼ変わらない入浜塩田であった。鹹水を煮詰める釜は江戸時代からの石釜や欧米の塩釜に倣った鉄製平釜が使われた。

また、製塩のために鹹水を煮詰めたあとに副生成物として残る「にがり」を用いた炭酸マグネシウムの製造が鳴門で行われるようになり、多くの製薬工場ができた。製薬業は戦前の鳴門の地域経済を担う一大事業となり、現在もつづく製薬会社の多くがつくられた。

戦後、全国的に塩不足に陥り、国は塩の国内生産を増大させる政策を開始した。それにより、入浜塩田よりも生産効率が良く増産が見込める流下式塩田への転換が進められたが、入浜塩田に使われた用具は、地元有志により収集・保存され、「鳴門の製塩用具」として、1967年に国の重要有形民俗文化財に指定されている。

その後、イオン交換膜透析装置を用いた製塩により、塩の製造が工業化され、かつて300haもの面積で広がっていた鳴門の塩田は姿を消したが、当地では今も変わらず小鳴門海峡の海水を用いた製塩業が営まれるとともに、近代以降、製塩の過程で発生する「にがり」を原料とした薬品や化学製品が次々と開発・製造されるなど、塩に関係する産業が現在も継続している。

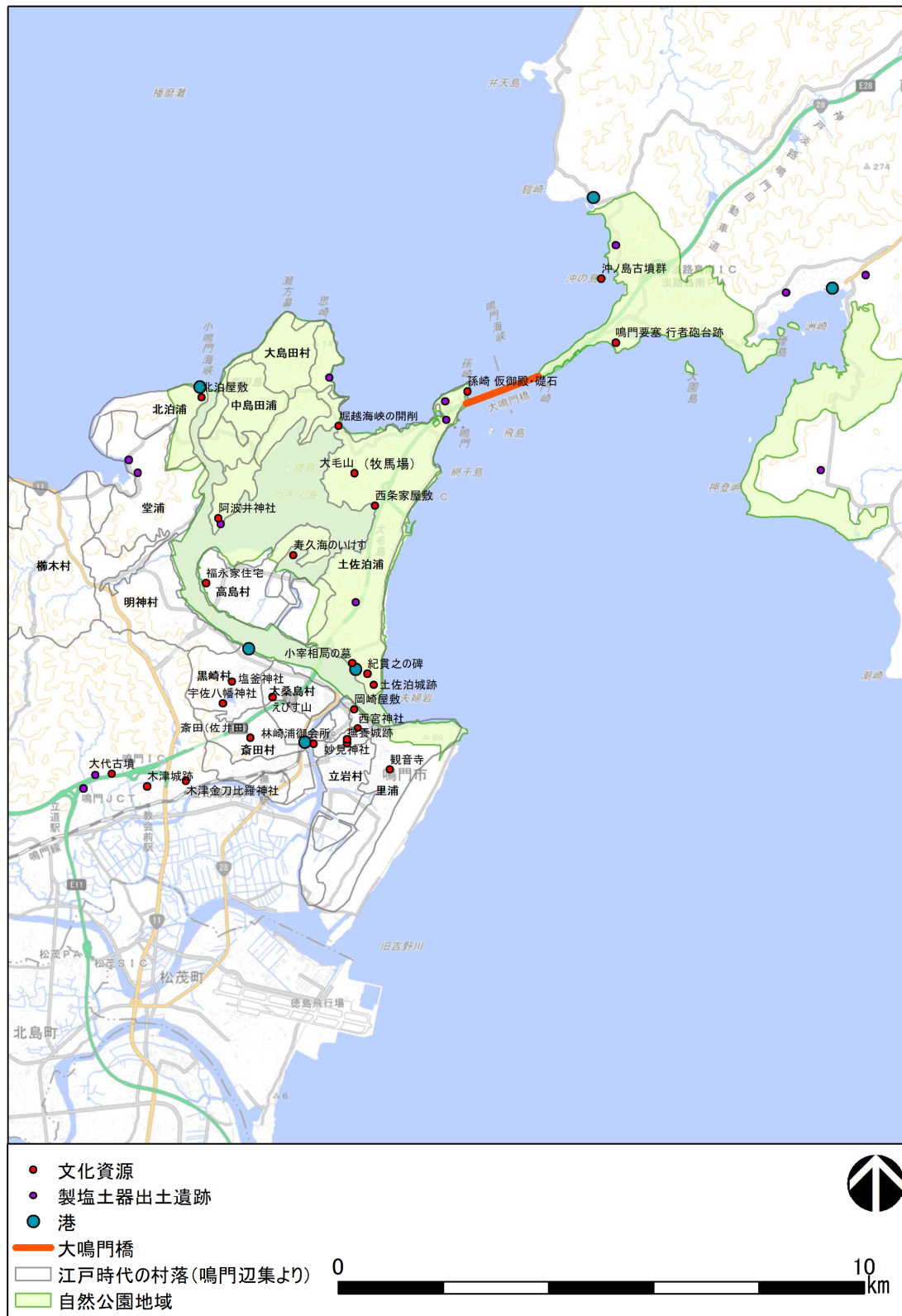
「鳴門海峡の渦潮」に関わる人々の生活・生業に関わる有形・無形の文化財リスト

「区分」凡例：◎（有形・不動産） ○（有形・動産） △（無形）

項目	区分	構成資産の名称	備考
古代の遺跡	◎	旧石器時代の遺跡	
	◎	縄文時代の遺跡	
	◎	弥生時代の遺跡	
	◎	古墳時代の遺跡	
古代の交通	◎	粟門	
	◎	南海道(福良～撫養)	
古代・中世の荘園	◎	石清水八幡宮領阿万荘	
	◎	高野山領賀集荘	
	◎	人丸影供領里海荘	
	◎	泊荘	
中世の水運と港	◎	撫養(武屋)・牟夜戸	
	◎	土佐泊	
	◎	木津	
	◎	北泊	
	◎	斎田(佐井田)	
	◎	福良泊	
	◎	あなか	
秀吉の四国征伐と 鳴門海峡	◎	佐泊城(城主森氏)	
	◎	木津城(城主篠原氏)	
徳島藩と鳴門海峡	◎	撫養城	
	○	「阿波国大絵図」(18世紀後半)	『鳴門辺集』
	◎	・「御巡見所」	
	◎	・「大毛山」(御林)	
	◎	・「馬」「馬関垣」	
	◎	・「塩浜」	
	○	「御鹿狩」	
	◎	土佐泊浦「牧馬場」	奥州馬放牧
	○	「板野郡分間絵図」(文化12年)	三木文庫所蔵
	◎	・大毛島「柵」	
	◎	大毛牧制動人=西条家	
	◎	西条家屋敷「御成間」	
	○	千山丸(重文)	徳島城博物館所蔵・安政4(1857)年建造
	◎	堂浦「御魚釣場」	
	◎	孫崎=仮御殿・礎石	『鳴門辺集』
	○	岡崎十人衆	藩主巡検
	○	撫養屋敷乗船(一言丸)	

項目	区分	構成資産の名称	備考
	◎	岡崎屋敷	国文学研究資料館所蔵
	○	・撫養岡崎屋敷差図	
	◎	北泊屋敷	
	◎	林崎浦御会所・御分一所	
	○	福良十人衆	
	◎	福良浦御屋敷	
	○	淡州御街道筋処々真景	
	△	淡路人形浄瑠璃(国重要無形民俗文化財)	
	○	引田家資料	上村源之丞座の座元引田家資料
近世の「撫養」	○	『鳴門辺集』(寛政7年)	
	○	「撫養地図(分間図)(文久3年)	県立文書館岩村家文書
	◎	撫養港	
	○	廻船問屋山西家と古文書	
	○	旧山西邸板戸(帆船)	県立博物館所蔵
	◎	仙龍寺	山西家建立、淡州新五郎天井絵寄進(嘉永7年)
	◎	観音寺	山西家奉納額
	◎	宇佐八幡神社	山西家氏神
	◎	木津金刀比羅神社	慶長6年、撫養城主益田大膳創建。撫養の廻船問屋・商人の寄進
	◎	妙見神社	廻船問屋近藤利兵衛創建。撫養の廻船問屋・商人の寄進
漁業関係	◎	堀越海峡の開削(江戸初期)	塩田地帯の物資移動の便宜・内の海の水質保全と養殖、寿久海の養殖
	○	豊富な魚種	
	○	海藻(ワカメ・カジメ・ホンダワラ類)	
	○	養殖ワカメ(1960年代半ば頃開始)	
	◎	寿久海のいけす(ハマチの養殖)(安永期)	『鳴門辺集』
	◎	漁業集落	「船だんじり」
	◎	・堂浦 阿波井神社祭礼	
	△	鯛の一本釣り	

項目	区分	構成資産の名称	備考
	○	カンコ舟	
	○	テグス・テグス船	
	○	東の前頭 鳴門若布	「御国産名物見立相撲」
塩業関係	○	万葉集（「淡路島…藻塩焼きつつ海人娘子」（巻 6-935））	
	○	平城宮跡木簡・牟夜海	
	◎	撫養 12 か村の塩田	「撫養塩田発祥の地」石碑
	◎	・えびす山(市史跡)	
	◎	・塩釜神社	
	○	斎田(本斎田)塩	
	○	山稼ぎ	
	◎	福永家住宅	国指定重要文化財
	○	鳴門の製塩用具	国指定重要有形民俗文化財
	○	撫養塩田関係古文書	
	○	鯛の浜焼き	
	○	赤飯にゴマ砂糖	
	◎	苦汁と化学工業	
	◎	・富田製薬（株）（明治 26 年創業）	
	◎	・大塚製薬（株）（大正 10 年創業）	
近現代の観光と往来	◎	名勝「鳴門」（国指定）	昭和 6 年指定
	◎	鳴門公園の成立	昭和 25 年瀬戸内海国立公園編入
	○	案内リーフレット	
	○	撫養自動車(撫養～徳島間)	
	○	阿淡連絡汽船	
	○	南海電鉄	
	○	淡路鉄道	
	◎	大鳴門橋(1629m)	昭和 60 年完成
外国人と鳴門の渦潮	○	「鳴門浦大將軍源朝臣義直」	『海東諸国記』
	○	ケンペル『日本誌』（元禄頃）	1777～1779 年出版（ドーム版）
	○	シーボルト『日本』（文政 9 年）挿絵	
	○	モラエス	
	○	外国語のガイドブック	
その他	◎	鳴門要塞	



「鳴門海峡の渦潮」に関連する主な文化資源の位置図

「鳴門海峡の渦潮」にまつわる沿革と概況

「鳴門の渦潮」にまつわる沿革と概況

① 古代～中世

		観 光	芸 術 ・ 文 学	生 業（塩業）	人 の 往 来
旧石器時代 縄文時代 弥生時代	鳴門海峡ができ、人が住み始める 鳴門海峡の地形が形成される（約12～13万年前） 鳴門海峡に海流が流れるようになる（約9,500年前） 現在とほぼ同じ姿の瀬戸内海が成立（約5,700年前）			鳴門海峡付近からナウマン象・オオツノシカの化石や旧石器出土。 弥生時代に、淡路島周辺の海岸部に集住する人々が現れ、金属器を用いたほか、製塩を行った	
古墳時代	航海術と製塩技術を発達させる 海人集団が鳴門海峡沿岸で漁撈・製塩活動を行う 鳴門海峡の両岸で古墳が多数つくられる			弥生時代～古墳時代にかけて、鳴門市日出で土器製塩が行われる 淡路島阿那賀沖ノ島古墳群から漁具が出土。	高度な製塩技術・航海術をもつ「海人」が、畿内の王権に重用され、活躍する
奈良時代～平安時代	文献に鳴門海峡に関する記述があらわれる 鳴門海峡が官道に設定され交通の要衝となる 紀貫之が阿波の水門を渡り、和歌を詠む（935） 「としごろをすみしところのなにしおへばきよるなみをもあはれとぞみる」（『土佐日記』）		『古事記』に伊弉諾・伊弉冉が天ノ沼矛をかき回して渦が生じ、矛の先から落ちた塩の結晶が積もってオノコロ島ができたと記載される（720） 『日本書紀』に「あわのと（粟門）」が潮流の速い場所として記載される（720） 「淡路島 松帆の浦に朝なぎに 玉藻刈りつつ夕風に藻塩焼きつつ海人娘子」（『万葉集』）	阿波国板野郡牟屋海から「若海藻壺籠」、淡路国三原郡阿麻から「塩三斗」が平城宮に献納される（8世紀ごろ） 藻塩法による製塩	五畿七道のうちの南海道に鳴門海峡が含まれ、四国と畿内を結ぶ海上交通路となる 鳴門海峡付近に海賊出没（『土佐日記』）
鎌倉時代	鳴門海峡の渦潮の様子が書物に詳細に記される 阿波国・淡路国に守護が置かれる（12世紀末ごろ） 『平家物語』に「鳴戸」と記載される（成立年代未詳）		「良き妻（め）」の掛詞の「良き海布（め）」から想起される言葉として、「鳴門」が使われた、『鳴門中将物語（なよ竹物語）』が成立する（13世紀ごろ） 『源平盛衰記』において、「阿波の鳴門の癖なれば、満潮引潮あらそいて」と潮の満ち引きの激しい様子が描かれる（成立年代未詳） 謡曲『通盛』において、「鳴門の浦静かなる」と土佐泊浦の海面の穏やかな様子が描かれる（15世紀ごろ）	淡路島の河口近くの三角州を利用した汲潮浜や大毛島などの海岸で鹹砂をつくる製塩法が行われる 汲潮浜による製塩	鳴門海峡付近に梶原氏・小笠原氏などの水軍領主出現 撫養港が問丸*のある四国の良港として発展する *問丸：港湾の中で貨物輸送の仲介として、倉庫保管、陸揚げ作業の監督、物資の公益、委託販売、宿泊所等の機能を果たした
室町時代～戦国時代	鳴門海峡の両岸の港が全国有数の商業港として発展する 鳴門海峡や紀伊水道周辺を拠点に水軍領主が活躍する 足利氏により細川氏が阿波国・淡路国の守護に配される（1336） 足利義詮が阿波・淡路、土佐沿岸の海域を支配していた水軍領主安宅氏に淡路沼島への海賊退治を命じる（1350）	『太平記』『大日本史』『阿波志』等によれば、大地震で鳴門の潮が枯れて干潟となった（1361）	『太平記』において、「雲珠の巻くに随って、浪とともに舟の回ること、茶臼を推すよりも速やかなり」と渦の様子が描かれる（1361）	「武屋」・「土佐泊」から「藍」が兵庫北関に積み出される。また、「アワ塩」が安宅水軍の船舶などにより兵庫北関に運ばれる（1445年『兵庫北関入船納帳』）	淡路国由良を本拠とした「安宅水軍」が細川氏・三好氏の水軍として紀伊水道一帯で活動。 朝鮮「海東諸国記」に「阿波州鳴門浦大將軍源朝臣義直」とあり（1471） 長宗我部元親が水軍領主の森氏の支配する土佐泊城を残して阿波一国を平定（1582）

「鳴門の渦潮」にまつわる沿革と概況

② 近世

安土桃山時代 ～ 江戸時代	観光	芸術・文学	生業（塩業）	人の往来
蜂須賀家政が豊臣秀吉から阿波国を拝領し、撫養城を築く(1585) 撫養塩田の開発が始まる 岡崎城が一国一城の定めにより廃される（1638） 文化人の中で観潮が盛んに行われるようになる 地図に地名として「鳴戸」「鳴門」が用いられるようになる（17世紀） 「鳴門辺集」が作成される（1795） 伊能忠敬が撫養を訪れ、阿波沿海の測量を開始（1808） 紀實之の歌碑が土佐泊 松瀬山に建てられる（1867）	江戸時代を通じて文化人等による観潮が盛んに行われ、渦潮を題材にした和歌・俳句・絵画や、渦潮見物自体を作品として表現する「観潮記」・「紀行文」が多数残される 蜂須賀侯が孫崎付近に観潮のための茶屋を建てる（現在のお茶園展望台） 大毛島の孫崎で観潮が行われ、茶店や案内人が現れる 塩業家が塩業労働者をねぎらうための浜子遊山を行い、その中で小鳴門海峡に発生する速い潮流の見物が行われた	井原西鶴が『西鶴名残の友』において、観潮の際の感想を記す（1699） 松尾芭蕉が以下の2句を詠む 「一汐に月引き落とす 鳴門かな」 「時雨けり晴けり鳴門 汐干けり」 （17世紀ごろ） ケンペルが『日本誌』に航海の難所かつ詩歌の題材とされる場所として鳴門海峡を記す（1727） 加藤景範が『観瀾記』において、観潮の際の感想を記す（1781） 葛飾北斎が「北斎漫画」に阿波の鳴門を描く（1814） シーボルトの『日本』に挿絵とともに鳴門が記載される（1832～51） 歌川広重が「六十余州名所図絵」に鳴門を描く（1853～1856）	馬居七郎兵衛、大谷五郎右衛門が藩主の招きにに応じて、撫養の桑島に塩田を開く 慶長年間に、篠原孫左衛門が撫養の高島に塩田を開く 瀬戸内海沿岸では、広い砂州と潮汐干満差を利用した入浜塩田が行われた 入浜塩田による製塩 板野郡中心部の12か村に塩田ができ、「撫養十二ヶ村」と呼ばれる 17世紀後半に完成した入浜塩田法が瀬戸内各地に伝播し、瀬戸内の塩生産が全国需要の約半分を占め「瀬戸内十州塩田」として知られるようになる 小鳴門の竹島（現在の高島）では島民のほとんどが製塩に携わる	徳島藩主渡海の際、鳴門海峡の荒潮を渡る加子連中として里浦と林崎浦から「岡崎十人衆」が召し出される（1586） 大坂の陣(1615)の軍功により、撫養と福良を結ぶ鳴門海峡が重要とされ、蜂須賀家の支配統制により海上交通路や港などが整備される 18世紀後半、入津廻船の減少に伴い撫養湊は衰退したが、他国からの米穀と肥料の移入を許可し、流通を再編成したことで、19世紀以降、大きく発展した。 堂浦をはじめとしたカンコ舟の集団が大勢亡くなる海難事故が発生し「堂浦の百人流れ」と呼ばれる
明治時代 観潮が広まり、鳴門の渦潮が自然資源・観光資源として活用されるようになる 土佐泊浦、三ツ石、高島の3村が鳴門村となる(1889) 鳴門要塞が設けられることになる（1899） 皇太子殿下が鳴門公園に行啓（1900） 鳴門要塞が由良要塞に合併される（1903） 帝国水路部が海図「日本瀬戸内鳴門」を刊行する（1904） 鳴門公園が完成（村営）（1908）	1882（明治15）年、汽船便による大阪、兵庫、淡路、讃岐沿岸航海が開始 小松宮彰仁親王が来県、鳴門観潮を行う（1900） 1906(明治39)年から第二次世界大戦終戦までの間、渦潮を含む鳴門海峡の周辺は軍事戦略地域となったため、写真撮影、写生及び調査等が禁じられた。 1907(明治40)年、鳴門の遊覧案内グループである鳴門保勝会が誕生 1908(明治41)年、鳴門公園及び公園道路が竣工	T. Philip Terry『A Guidebook for Travelers』等の外国人向けの旅行ガイドに鳴門の渦潮が紹介される（20世紀初頭） 明治時代に書かれ始めた少年向け読み物の中で、鳴門の渦潮が舞台のものが現れる（20世紀初頭） 田山花袋が『京阪一日の行楽』に「天下の大観」と鳴門の紀行文を記す（1923） モラエスが鳴門を訪れた際の記録をポルトガルの新聞に寄稿する（1924） 与謝野鉄幹・晶子夫妻が四国周遊の際に鳴門で観潮し、短歌を詠む（1931）	塩の生産が過剰になり、塩の価格が下落する 瀬戸内十州塩田は休浜による生産制限等を行う 明治中期、富田久三郎がにがりを原料として炭酸マグネシウム等を製造し、製薬業発展の基礎をつくる 1905(明治38)年国による塩専売制度が施行 明治末期から塩業整理により製塩効率の悪い塩田が廃止され、徳島県内の塩田が減少していく	

「鳴門の渦潮」にまつわる沿革と概況

③ 近～現代

大正時代	全国的な観光ブームを背景に、鳴門への交通網が整備される	観光 芸術・文学 生業（塩業） 人の往来			
		観光	芸術・文学	生業（塩業）	人の往来
	東久邇宮裕彦親王、鳴門公園にて観潮(1918) 鳴門公園大毛山の「根上がり松」が国天然記念物に指定(1924)	1916(大正5)年、阿波軌道が開通（撫養の蛭子駅～応神村の中原駅） 中原駅～徳島市までは発動機船で連絡 1925(大正14)年、淡路鉄道全線が開通			1922(大正11)年、阿波連絡汽船株式会社が創立 撫養～福良間の定期便が開通し、観潮期には鳴門公園下へ寄港するようになる
昭和時代	鳴門海峡周辺で営まれる塩業や漁業が近代化される 鳴門が国名勝に指定(1931) 土佐泊 松瀬山の紀貫之の歌碑が潮明寺の前庭に移される(1931) 太平洋戦争終戦により、全国の要塞地帯が廃せられる(1945) 市制がしかれ、鳴南市と称するが、鳴門市に改称(1947) 昭和天皇が御料船で鳴門を視察 鳴門が瀬戸内海国立公園に指定される(1950) 読売新聞社が鳴門海峡学術調査を実施(1956) 小鳴門橋が開通する(1961)	1931(昭和6)年、鳴門の渦潮を展望するのに最も好適の地として、鳴門公園及び付近一帯の丘陵林地と海岸及び島嶼が国名勝に指定される 1933(昭和8)年、淡路鉄道が鳴門観潮連絡券の販売を開始 1934(昭和9)年、瀬戸内海に面する11都道府県が瀬戸内海国立公園をつくる 商船会社が瀬戸内の水路を活用した観光ルートを開発しはじめる 1948(昭和23)年、淡路交通株式会社が鳴門岬にバンガロー、食堂、売店を設置 1950(昭和25)年、鳴門・淡路島両側の鳴門海峡周辺一帯が瀬戸内海国立公園として追加指定される 1985(昭和60)年、大鳴門橋が開通	吉川英治が『鳴門秘帖』を著し、人気を博す(1926) 以後、鳴門海峡を舞台にした大衆文学や映像作品がつけられるようになる	戦後、全国的に塩不足に陥り、塩の国内生産を増大させるため、入浜塩田からより生産効率が良く増産が見込める流下式塩田への転換が進められる 流下式塩田による製塩 イオン交換膜法による製塩 1972(昭和47)年、撫養塩田が塩業整理の対象となり、塩田が廃止される (全国の塩田廃止)	1939(昭和14)年、土佐泊～千鳥ヶ浜間に遊覧乗合馬車が営業開始 淡路鉄道が京阪神の9つの電鉄会社と鳴門観潮連絡運輸を開始
平成時代	橋の開通を契機として、鳴門への交通手段や観潮の方法が変化 「根上がり松」が枯死のため国天然記念物の指定を解除される(2000)	1998(平成10)年、明石海峡大橋が開通する 2000(平成12)年、大鳴門橋の橋桁下部に遊歩道「渦の道」が完成、渦潮を45メートルの高さから見学できるようになる			

「鳴門海峡の渦潮」の文化的価値とりまとめ文書

「鳴門海峡の渦潮」文化編

発行：兵庫・徳島「鳴門の渦潮」世界遺産登録推進協議会
